2020年『QCサークル』誌 編集委員長あいさつ

『QCサークル』誌 編集委員会
委員長　光藤義郎

10年の長きにわたって，本誌編集委員長を務めてこられた東海大学名誉教授綾野克俊先生の後を継ぎ，このたび同委員長を拝命することとなった元文化学園大学，現在，一般財団法人日本科学技術連盟嘱託の光藤です。

既にご存じの通り，今世界を震撼させている最大の関心事は，パンデミック化した新型コロナウィルスの世界的蔓延です。私たちの生活はもとより，ものづくりの現場や世界経済にどのような影響が広がっていくのか想像するだけでも心が痛みます。とはいえ，この10年来，東日本大地震をはじめとして超大型台風や集中豪雨といった天変地異の頻発，また世界的規模の社会/経済環境の激変なども私たちの生活をつねに脅かしてきました。

こういった外部環境の大激動の中にあって，私たちのQCサークル活動はどのように変化してきたのでしょうか。誕生から50数年，諸先輩方のご尽力によって大きな進化/発展を遂げた面も多々見られる一方，サークル編成ができない，メンバーが集まらない，テーマが決まらない，成果主義が蔓延してきた，発表のための活動になってきた，発表会そのものも形骸化してきた，大会開催数も落ちてきた，支部・地区の推進組織運営にも行き詰まりが見られる等々，至るところで制度疲労とも思える事態が発生している点も多くのQCサークル関係者が認めるところです。本誌自体も，かつては16万部を超えていた購読部数が，今やその10分の一近くまで激減しています。もちろん，この背景には，ものづくり現場の消失やデジタル化による紙/文字文化の衰退などもあったと思われます。大事なことは，こういった客観的実態認識のもと，本誌の果たすべき役割（今までの役割/今後果たすべき役割）を再認識し，何を継承し，何を変えるべきかをしっかり見極めること，いわゆる**「不易流行の本質に迫る」**それがまさに今この時だと感じています。

とはいえ，2020年度の編集方針は綾野前委員長のもと既に確定し，それに基づいて特集はじめ多くの企画が現在進行中です。上述した**「不易流行を見定めた上での本誌の編集改革」**については今年度中に検討をスタートさせ，その具現化については2021年度からにしたいと考えています。

本誌は手に取って実際に読んでいただくことで初めてその効果が期待できるものですので，何はともあれ購読者を増やさなければ意味がありません。そのためには質の良い雑誌にすること，そのためには編集委員を始めQCサークル活動に関わるすべての人々のご協力/ご支援が必須です。今後とも，QCサークル活動の更なる普及/発展を目指し，本誌の質向上に対して絶大なるご協力ならびにご支援を重ねてお願いし，本誌編集委員長としてのご挨拶とさせていただきます。